

## レオンハルト・ラガーツ「今日の女性の精神的な闘い」<sup>1)</sup>

内 田 博 (訳)

藤女子短期大学 生活学科

### 翻訳にあたって

ここに訳出したのは、レオンハルト・ラガーツが、1907年にバーゼルで開催された女性禁酒同盟の集会で行った演説 *Der sittliche Kampf der heutigen Frau* を同年に出版したものである。<sup>(1)</sup>

著者のレオンハルト・ラガーツは、1868年7月28日にスイスのタミンスに生まれ、1945年に保養先のウンターエーゲライで死去した。ラガーツは、スイスとドイツで神学教育を終えた後、20歳のときから各地の教会で牧師を勤めた。その後、チューリヒ大学神学部組織神学教授に転じた。大学在職中から独自の宗教社会主義を構想し、退職後は、チューリヒで雑誌 *Neue Wege* を創刊して、社会・文化批判、平和運動、労働問題等に論陣を張った。また、一時期はスイス社会民主党員でもあった。<sup>(2)</sup>

以下の翻訳は、私自身の研究上の必要から行ったものであり、本来は研究論文を執筆する中で消化されるべきものであるが、講義と演習の便宜を考えて公開することにした。世紀転換期にキリスト教社会運動の母性主義的な観点からなされた女性解放論のひとつとして読んでいただきたい。

なお、訳文中の下線は、原文の強調箇所であり、[ ]内は、訳者が補った部分である。

### 註

- (1) 底本は、*Der sittliche Kampf der heutigen Frau. Vortrag von L. Ragaz, Pfarrer, Basel 1907*である。
- (2) ラガーツの生涯と活動に関して、私が参照したのは、J. Wanner, *Leonhard Ragaz. Aus dem Leben und Werk eines grossen Schweizlers*, Burgdorf 1946である。

お集まりの皆さん！

長いあいだ世界中をおおっている大いなる不安が、あらゆる存在の中でもっとも保守的な存在である女性をも、ますます強く捉えるに至っています。この状況から、女性運動は発生しました。

確かに、人々の気質によっては、はっきりいえば、あるひとにはあざけりの気持ちを、あるひとには怒りを、あるひとには恐怖心を抱かせるようなイメージを与える者たちも、女性運動の中にはいます。髪を短くして、できるだけマニッシュなファッションや振る舞いをする中年独身女性。眼鏡をかけてインクの染みを指につけた文学者きどりの女性。シャンパンを片手に葉巻をくゆらせて、自由恋愛について語る解放された社交界の夫人。男性にはそれを少しでもうらやむ勇気をもつことさえ難しいような小説を書く女流作家。怒りで目をむきながら女性特有の雄弁を惜しげもなく発揮して、大衆集会で、男性たちには、なかば不安感をなかば驚きの気持ちを起こさせ、他の女性たちとは口論し、家に帰れば、ソファに横になって小説を読んだり、机に向かって新聞投稿を怠りたり、あるいは、神経症的な状態になって周囲の者たちを危険にさらすような既婚女性。また、そのために、穴だらけの上着を着てかまどの前に立って肉を焼くような既婚男性もいれば、世界の没落を象徴するような状態の子供部屋で、子供を暮らせている既婚男性もいます。

このようなイメージが実際に現れてきたこと、しかも現在でもそれが変わらないということは否定できません。しかし、そうしたイメージによって女性運動を断罪しようとしたり、そうしたイメージをことさらオーバーに捉えようとする者があれば、その者は哀れなほどに頭が古く、文字通りに無教養な人間です。というのも、物事をその深い本質や真の目的において問題にするのではなく、いくつかのその随伴現象や、さらには、それが生み出す異常増殖物で判断しようとするのは、たんなる無知だからです。このことは、社会運動一般と同様に、その一部でもある女性問題にあてはまります。

また、ストライキやロックアウト、賃上げと労働時間短縮

1) HIROSHI UCHIDA: Translation. *Der sittliche Kampf der heutigen Frau* (by Vortrag von L. Ragaz).

などの問題で紛糾した大衆集会や、社会民主党の新聞の粗野な記事、社会主義の下品な代表者たちのことを耳にして、そうした物事の全体を、なかば笑うべき、なかば悲しむべき時代錯誤であり、いかれた連中や権力亡者の扇動家が勝手にやっていることだと、考える者もいます。物事をこのように判断する仕方は、熱病や精神病の患者に対して、訳の分からない話をしたり、目をむいたり、ひっくり返ったりしたからといって文句を言うのと同じほど馬鹿げたことです。なぜなら、こうした現象の本来の原因である病気についてなにも知らずに、その結果として生じたにすぎない愚かしいことや悪いことだけを見ているのと、同じだからです。

私たちは、あらゆる点でこのような皮相な見方を恥じることから、始めなければなりません。それこそが、私たちの精神文化が劣っていることを示しているからです。社会運動の根本的な原因が、なかば経済的でなかば精神的な、世界を震撼させる危機にあるのと同様に、女性運動も、後に述べるように、こうした危機の一現象形態にすぎないのです。女性運動は、暇な女性の頭脳が生み出した突飛な思いつきではありません。女性運動を出現させるだけのきわめて現実的で実践的な諸要因が存在するのです。

これを冷静にまじめに受け止めようとするならば、女性運動が経済的諸関係にその根拠をもつという点を理解するのがもっともよい。そこで私たちも、女性運動の意義と連関について、この点から話を始めることにしましょう。

まず、現在の女性の経済的状況と70・80年前のそれとを比較してみましょう。そうすれば、現在の状況が、当時に比べてきわめて不利なものであることがすぐに明らかになります。当時の女性は、現在よりもよく扶養されていただけでなく、家庭経済においても、社会経済においても、現在よりもはるかに重要な意義をもっていました。それを女性の三つの階層に関して、簡単に見てみましょう。

中流の商人や金利生活者の夫人である市民階級の女性の場合。彼女たちは、社会的にも経済的にも必要な役割を担っていました。彼女たちは仕事や、真剣に取り組むべき課題もち、それゆえに、しっかりと充実した生活を送っていました。家政は、彼女たちの領分の小さな一部をなすにすぎず、しかも、彼女たち自身が家政領域の主人だったからです。家政は、偉大な哲学者の表現を用いれば、かなりの程度で、なお「封鎖商業国家」でした。家政は、できる限り多くのものを供給していました。家政の領域で、パンやケーキが焼かれ、糸が紡がれ、織物が織られていました。郊外では、家庭菜園で野菜や果樹が育ち、自家醸造でワインが作られることもありました。これらは圧倒的に女性の仕事であり、しかも女性は、事業の面でも、現在のような夫の助手以上の存在でした。企画し、配慮し、監督し、命令しなければならないことがたくさんあり、それゆえに女性は、肉体的面でも精神的面でも高い能力を得て、その能力を維持していたのです。なぜなら、

一つしかない小さな領域であれ、自分のものである領域を支配し、それに責任を負うことが、なによりも、その人間の人格を陶冶するからです。

手工業者階級の既婚女性の場合も同様です。彼女たちも自分の領分をもっており、しかもそれは、商人の妻よりも大きかったのです。職人や徒弟も家族の一員であり、彼らも親方の家で寝食をともにしていました。親方の妻は、彼らの食事の世話をするだけでなく、土曜の夜に彼らが着る「きれいなシャツ」も用意しなければなりませんでした。また、徒弟の腕を一人前にしようとするれば、場合によっては、一たいていの場合そうなったのですが—よくきくびんたをくれてやるだけでなく、彼らを修行遍歴の旅に出す世話をしたり、教育したり、母親代わりになって助言したりしなければなりませんでした。彼女たちは、経済的な使命とともに、倫理的・宗教的な使命ももっていたのです。似たような感謝の気持ちを思い起こさせてくれるような親方のおかみさんは、実際にたくさんいましたし、この階級の多くの女性が、今日でいえばちゃんとした女性教師に匹敵するような母親になりました。このような女性たちも、その使命を通して、精神と意志を陶冶してきました。彼女たちは、人間の倫理的な態度に関してきわめて重要なことですが、健康な自己意識に満たされていませんでした。彼女たちは、自分が必要とされていることを、自分の労働に価値があることを知っており、それゆえに自己の固有の価値を弁えていました。彼女たちの重要さはきわめて大きかったので、例えば、親方のおかみさんは、夫が亡くなって親方がいなくなっても、おかみさんをなくした親方がやっていける以上に、経営を続けていくことができるほどでした。私たちがかつて目にしていたのは、[スイスの国民的作家] イェレミアス・ゴットヘルフの『遍歴』における職人ヤーコブスの妻なのです。

次に、当時は「労働者の妻」と呼ばれていた最下層の日雇い労働者階級の女性に移りましょう。彼女たちは、劣悪ではあっても、とにかく一つのを所有していました。それは、ささやかながらも自分の家庭であり、小さな家がある場合もありました。彼女たちは、まだ多くの時間を家庭で過ごすことができ、子供たちの母親であることができました。このような階層にも親密な家庭があり、ささやかではあれ、真の女性の幸福と子供の幸福がありました。

ここにあげた三つの階層は、都市における女性の世界のおおよそを表現するものです。最も重要な女性類型である農村女性については、ここでは取り上げません。その理由は、簡単にいえば、彼女たちは今日に至るまで、旧来の形態のままで存在しているからです。たしかに多くの変動がありました。が、それらは、旧来の様式を本質的に変えるほどの意味はもたなかったのです。いずれにせよ農村女性には、これまでに他階級の女性について述べてきたことが、より以上にあてはまります。彼女たちは、家庭の経済的・精神的な運営に関し

て、より以上の意味をもっています。それゆえに彼女たちは、一都市の女性たちの感情を害さないようにいうとすれば一生活の過酷さ、労働や金銭の圧力、文化手段の欠乏に悩まされさえしなければ、女性の自然が発揮することのできる完全な深みと力とに、もっともよく到達することができるのです。

したがって、農村女性については話題にしません、ただ、もう一つの別の女性類型については、ここで考えておかねばなりません。それは、あらゆる階層に存在する女性類型であり、下層よりも上流の方に多く、しかも、男性が女性運動の全体を彼女たちの窮状から説明しようとしているために、私たちの問題にとっても重要な類型です。それが、いわゆる中年独身女性です。中年独身女性は、私たちに周知の原因を前提とすれば、以前は、現在よりも少なかっただけでなく、その境遇もまったく違っていました。私たちが描いてきた時代の家政は、多くの女手を必要としました。娘は歓迎されましたし、未婚女性が家庭に存在することが、現在よりもはるかに必要なことでした。兄弟姉妹の家を手伝い、世話をしてくれる「おばちゃん」がたくさんいて、私たちドイツ系スイス人のあいだでは、このような独身女性はご承知のように親戚のおばさん(Familienmagd)で通っていました。このような女性たちは、代々受け継がれて、おじいさんの世話をしたり、父親が子供の頃に腕に抱いていた、孫をあやしていたりしたものでした。彼女たちは、こうして家族の一員と見なされ、尊敬され、愛されていましたし、家庭の幸福を満喫し、母性を発達させることもできたのです。このように比較してみると、当時の女性は現在よりもよかったように思われます。

なぜなら、私たちが描いたこの状態が、どこでも同じように明瞭にというわけではないにしても、完全に変化してしまったか、あるいは、完全に消滅しつつあるということに疑問の余地はないからです。老いても活力に満ち、生き生きとして魅力的であった、様々な中年独身女性が、都市の、さらには、部分的には農村の家政からもいなくなってしまいました。こうして家が空になってしまうのを、私たちは、「ペナーテースの退去」と題された「スイスのロマン派の画家」アルベルト・ヴェルティの最近の絵によって想像することができます。彼が示してくれたのは、家の隅や暗がりに住み着いていたおとなしい精霊たちが、それまで家を所有していた詩人が死ぬとともに家を去ってしまう様子でした。まさに、多くの不便で不健康なものとともに、多くの詩と魂も家政から去ってしまったのです。

現在の私たちは、たいていは借家に住んでいます、空間をできるだけ利用できるように作られた借家には、たくさんの古い家具を置く場所もなければ、家の精が棲む場所も、詩が存在する余地もありません。そこではもはや、パンを焼くことも、糸を紡ぐことも、織物を織ることも、編み物をする 것도、裁縫をする 것도ありません。たとえあったとしても、いずれにしろ以前のようにではありません。たとえば客間

に糸繰り車がまだ置いてあったとしても、それは新品の飾り物であって、決して使われることはありません。なぜなら、母親も娘も、糸を紡ぐことができなくなっているからです。糸繰り車は、ロマンティックなものとして、全く違った過去から現在に取り入れられたにすぎません。それは小ざれいにされたことによって、その無意味さの中に、多くの女性存在の空虚さ、無意味さ、ロマンティックなものへの表面的な憧れを表現しているのです。なぜなら、糸繰り車を客間に据えるような女性たちの多くは、自分たちがひとかどの者であり、目的に合ったことや活気のあること、時宜に合ったことをしているかのように装ってはいても、実際には無であり、する事は何もないからです。

家政の領域は、ますます小さくなり、空虚になっています。確かに、中産市民層の既婚女性の多くは、たくさんの家事を切り盛りしていますし、子供の教育に関しては主導権をとらねばなりません。しかし、このような家政の義務は、労働や金銭的な配慮の圧力を強く受けており、女性自身に対しても、自己教育的な力や精神的な内容を失いつつあります。そして子供に関しては、事態を展望した論者の一人であるフリードリヒ・ナウマンが簡潔にまとめているように、現代の家政は、以前の家政に比べて、成長しつつある世代の教育に関して、はるかに無意味な機会しか提供していないのです。農家では、男の子や女の子がいかに小さい頃からものごとを経験し学んでいることでしょう！ この子たちは、家政の諸連関を見聞きし、労働に参加し、労働の中で教育され、なんらかの特別な仕事を任されることによって責任感を満たされているのです。それに比べると、今日の平均的な市民家庭では、手の込んだ、あるいは人工的な教育の代替物が生み出されたにすぎず、しかもそうした人工的なものはわずかの爽りしかもたらしません。そして、子供が成人すれば、あるいは子供がなければ、市民階級の女性は、農家よりもよい境遇にあるとはいえ、家具に挟まれて独りぼっちになり、しつこいほど几帳面に家具のちりを払うだけの生活をおくることになります。男性の方には職業があり、公的な生活がありますが、彼らも、市民家庭のような小さな領域では、生の内容を満たすことはできずに活力を失っていきます。また、男性は、自分の生業の領域からますます排除されています。独立経営が、絶対的にではないが相対的に、数を減らしているからです。一方では大経営、株式会社、百貨店が、他方では消費協同組合が男性を「職員や労働者として」吸収し、小さな店を経営していた独立自営の男性が、經理係や支配人に、上り詰めた場合には、重役になっていきます。手工業の親方にしても、職人や徒弟の世話をするのは、もはや例外でしかありません。職人も徒弟も、たいていは、もう親方の家で暮らしてはいません。しかも周知のように、工場が旧来の手工業を、それが例外現象となるほどに圧迫・解体したために、手工業の世界そのものが崩壊してしまいました。

日雇い労働者階級の女性はどうか？ 彼女たちは類型としてはまだ存在していますが、それに取って代わったのが、女性労働者です。彼女たちは工場で働き、居心地が悪いうえに侘びしい部屋が二つ三つついた長屋に住んでいます。朝になれば、小さい子供を託児所に連れていき、夜の間だけ、心も体も疲れて鈍くなった状態で、母親としての時間をもつのです。私が誤解していなければ、この類型は、現実には、多様な中間形態、移行形態、緩和形態を示しています。

ここで再び、未婚女性の問題に移ります！ まず、未婚の箱入り娘から始めます。彼女たちは、十中八九、家庭の中ではすることがありません。家事をこなすには、母親と、あとは、せいぜい娘が一人いれば十分であり、二人目以上の娘は滅多に必要なにはなりません。長女以外の箱入り娘は、何をしていたらよいのでしょうか？ [伴侶となる] 男性を待つのでしょうか？ 様々な理由から独身女性が増えてきている以上、そうした男性を待っていてもあまり希望はもてません。家は、もはや、それほど女手を必要としないのであり、正しく指摘されているように、「素敵なおばさん」は、極めて多くの場合、独身のおばさんのままでは、十分な内的生活を作り上げることはできません。年老いた忠実なお手伝いのおばさんという類型は、そうしたおばさんを必要とした家父長制的な状態が解体したという単純な理由で、滅亡段階に入りました。ひとがそれをどんなに望み、滅びはしないと主張したところで、事情は変わりません。

お集まりの皆さん、これまで見てきたように、深刻な現実の諸力が女性の生活に介入しています。女性の世界に不安をもたらしたものは、たんなる気まぐれや空想的な欲望ではありません。それをもたらしたのは、資本主義と呼ばれる経済の発展なのです。そして、近代史におけるこの巨大な変革要因こそが、とりわけ女性運動を生み出したのです。

しかし経済の発展は、女性に対して、重大な倫理的帰結をもたらしました。この点については、いままでの話の中ですでに示唆してありますが、それをこれから明確に述べましょう。この場で考察してきた多様な現象のすべては、一つの基本的な事態に還元することができます。すなわち、女性は、まともな仕事を、それゆえに生の内容を、生の幸福を、生の価値をますます奪われている、ということです。そこから生じた人倫上の危機は、一世紀の間に女性の世界に広まった二つの新しい現象のなかに表現されています。それが上流階級の夫人とプロレタリア階級の女性です。

上流階級の夫人！ そう聞いて、私たちは、どのような境遇を思い浮かべるのでしょうか？ 真剣に取り組むべきことも、しなければならぬこともなくて、社交とお飾りのために存在している女性、というのがその答えでしょう。上流階級の女性は、大量的な現象としては、健全な時代には存在せず、文化が爛熟し腐敗する時代に限って現れてきます。ギリシャではペリクレスの時代に、ローマでは共和制の衰退期に、と

いった具合です。私たちのような北方民族のあいだでは、上流夫人というものは、まず宮廷の産物として存在しました。地方の貴族が装飾品として奉仕するために、王の宮廷に引き移ったときに、腐敗の都であるバリで、この上流夫人が大量に現れました。それ以前の城主の奥方は、決して、いわゆる上流夫人ではありませんでした。彼女たちには、まじめに取り組むべき仕事があったからです。それに対してヴェルサイユでの貴族の夫人は、空虚で怠惰な存在となりました。その結果がどうなったかは、みなさんご存じの通りです。

しかし、そこから婦人の理想が生まれ、それが現在でも通用しています。近代の諸国民における富の増加と家の空虚化が進行したのに伴って、こうした婦人像が、私たちのもとでもしばしば理想とされています。現在のこうした状態の新しさは、多くの女性が、このような婦人の生き方を追い求めるべきである、としたところにあります。しかし、それはまったく好ましいことではありません。というのも、それは幸福な生き方ではないし、多くの貧しい娘たちが考えているような天国とはほど遠いものであり、むしろ、ダンテの描いた地獄に近いものだからです。こうした生き方を特色づけるのは、空虚に他なりません。それは、女性の人生から重荷を取り除いて、本来は豊かで力強い女性の心が備えている気分や情熱をもてあそぶことになります。価値のある労働という本分に厳しい教師がいらないために、女性を墮落させるのです。女性は労働以外に充足を求め、享楽的な生活を送る機会があったり、落ち込んだり退屈になったりすれば、安易な楽しみを追い求めるようになって、肉体と精神の最も高貴な力を浪費してしまいます。空虚さが人格を貶めるのです。というのも、こうした生活の全体は、結局は、男性を待つということに尽きるからです。男性が創造されてから女性が創造された以上、このこと自体は罪ではありません。しかし、この場合には偽りです。なぜなら、ここにあるのは、魂を傷つけるような遊びか、底意をもって自分を売り出すような同様に最悪の行為だからです。誤解しないでいただきたいが、家事労働や職業労働に従事していないすべての女性がここで述べたようなご婦人方になる、といっている訳ではありません。その存在の純潔さ、教養への関心、真の敬虔や社会福祉活動によって、こうした危険を避けることはできます。しかし、危険が存在すること、こうした婦人像が存在することは、否定できない事実なのです。しかも、このようなご婦人方は、女性が備えている創造的な思考を大きく失っています。お集まりの皆さん、私は皆さんに対しては、ご婦人方が夫に対していかに注意深く接しているのかとか、夫の方では、妻の不安や動揺、救われない魂を、はたして全身全霊で感じ取っているのか、といったことについて話す必要はありません。必要はありませんが、しかし、今述べた婦人像が決して真の理想ではないことは、はっきりと述べておきます。

このような婦人像と対極にあるのが女性プロレタリアです。

彼女たちには、とにかく仕事があり、十分すぎるほどの仕事がありますが、ご婦人方には余っているものが、つまり、時間と財産と文化的手段がありません。彼女たちは、疲れ果てています。そのあり方からして、女性性の素晴らしさを開花させることはほとんどできません。彼女たちの労働は、たいいていの場合、魂のないものであり、家政にふさわしい魂は、彼女たちにふさわしいものではありません。たしかに、妻の養えとなるような女性労働者もいますが、そうした女性労働者は、その境遇にもかかわらず、そうなったのです。多くの女性労働者は、魂のない無気力な存在になります。ここにも大きな空虚がのぞいています。ご婦人方と違うのは、たんにその形だけです。仕事は十分にあっても、それが真の労働ではなく、それゆえに、真の女性の幸福も真の女性の価値も、彼女たちにはありません。そしてここでも、このような空虚さが、人格を貶めます。女性のプロレタリアは、その貧困や生活上の欠乏感の中で、きわめて強力な試行錯誤の誘惑に捉えられますが、その誘惑は軍隊が慰安婦に提供する類のものなのです。もちろん私がいいたいのは、女性プロレタリアがこの道を進む他はないということではありません。幸いなことに、大多数の女性プロレタリアは慰安婦にはなりません。彼女たちを脅かすこうした危険がある、ということはいったったのです。また、私が女性プロレタリアとして勘定に入れているのは、女性工場労働者だけではありません。ウエイトレス、女性家内労働者、多くの他の種類の女性雇用者も、そのなかに含まれています。

上のご婦人方と下の女性プロレタリアが、このように、経済状況に由来する現代女性の人倫上の危機を体現しています。お互いに信じたくはないでしょうが、両者は双子の姉妹なのです。

しかし、根本的には一つであるこの対現象のなかには、これまでの女性の歴史の全体を貫く事実が、きわめてひどい形で表現されているのです。すなわち、女性が以前から陥ってしまう墮落も、女性に引き起こされる人格貶低も、すべては、男性によるものであれ、女性自身によるものであれ、二つの基本形態に還元して捉えることができるのであり、その基本形態が、女性は搾取の対象と見なされてきたということ、女性は享受の対象と見なされてきたということなのです。

女性は、以前からずっと搾取の対象となっていました。女性は、かつては略奪されたり、売買されていましたが、残念ながら今日でも、しばしばそうなのです。女性は奴隷でありましたが、その奴隷的な性質が、なお多くの女性にこびりついています。私たちの生活全体を見ても、女性は男性のためにある、という観念が染みついています。この観念も、男性も女性のためにあるということが同時に成り立つのであれば真理となるのですが、そうした深い意味においてはなくて、女性はできるだけ男性に利用されるものであり、利用させるものであるという意味で、通用しているのです。私たちの間

にもまだたくさんいる関白亭主たちにとっては、自分一人が家庭を支配するというのは当たり前のことです。彼らも、望ましい場合には、妻のことを正しく配慮しますが、妻は、たとえ関白亭主より大きな価値をもつ場合でも、夫に従属しなければなりません。姉妹は、もちろん兄弟より下にしなければなりません。大きくなれば、場合によっては兄弟が勉強できるように、あくせく働かねばなりません。兄弟が誇らしげに、白や緑や赤の帽子をかぶって通りをぶらぶらしている一方で、貧困に耐えていることもあるでしょう。しかも女性労働は、男性労働と同等な価値をもっている、あるいは男性労働以上の価値をもつ場合でも、一般的に男性労働よりも少なくしか支払われません。

このような女性の搾取は、子供の搾取とともに、工場制工業が登場した最初の時期に頂点を極めました。女性や少女が12-14時間かそれ以上の時間を働かねばならず、しかも、きわめて劣悪な飢餓賃金で全日労働と深夜労働をこなさねばならない場合もありました。母親たちは、面倒を見ることのできない子供たちを阿片でなだめたり、簡単に毒殺したりしました。お針子たちも飢えることがありました。人倫の荒廃は恐ろしいほどでした。こうした状態は確かに改善されましたが、しかし、ブラウスの縫製のために1日12時間働いても、週に9フランにしかならない女性もまだ存在します。ご存じのように、大都市の数多くの娘たちが、不十分な賃金のために売春に飛び込んでいきます。また、しばしば、雇い主によって、誇りを捨てて働き続けるか、首になるかという選択に迫られます。スイスの諸都市でも、生活環境とりわけ住宅環境は、労働者の子供の肉体と精神を純粋なものに保とうとするのが困難なものです。

さらに女性は、搾取されるということを精神的に内面化してしまいます。娘たちは、成人した男性と女性から、つねに男性に従うべきであり、男性に反する意志をもってはならないと説教されて育ちます。彼女たちは、誤った恭順さと慎み深さを教え込まれるばかりか、そうした鋳型に入れられてしまいます。女性自身が、そうなるように、自分自身を教育します。このことは、しばしば観念的な衣装で飾りたてられて表現されてきました。たとえばゲーテは、「女性は時とともに奉仕を学ぶ」と述べていますが、残念ながら、その念頭にあるのは、まさに道徳の王座をなすような愛の奉仕や道徳的成熟ではなくて、自分自身を搾取させ、利用させる奴隷の奉仕であり、女性の道徳的な人格を知ることのない奉仕です。

女性の人格貶低は、女性が享受の対象と見なされるという形態もとります。皆さんには、この言葉は強く聞こえるかもしれませんが。しかし、人格貶低をはっきりさせるためには、この言葉を用いないわけにはいきません。私が考えているのは、女性が動物以下に貶められるような破壊的な形態だけではありませんし、こうした形態については話す必要すらありません。それだけではなくて、女性の貶低を前提とするあら

ゆるニュアンスのことを考えています。このような前提によれば、女性は、男性に気に入られるために存在します。それが女性の存在目的になります。そのためには女性はきれいであるべきであり、きれいでないのは途方もない悪事であって、男性はそのような女性を、彼女が黄金の輝きで欠陥を埋め合わせていないならば、軽蔑し嘲ってもかまわないのです。女性はまた、かわいげがあり、魅力的で、そのうえ刺激的でもあるべきです。男性の生活を美的に明るくするもの、つまり、サロンやコンサート・ホールや舞踏会用大広間の飾りであるべきです。要するに、男性の余暇時間のおもちゃや、風変わりな芸術や文学の対象であるべきなのです。

女性の生活と努力は、部分的に、このような目的によっても方向づけられています。このような方向付けが、意識的であれ無意識的であれ、相変わらず若い女性の行動を貫いていることは、誰も否定できません。彼女たちは、気に入られることを厳しく訓練されていますが、それが意味するのは、結局、魅力的な見かけを作るということに尽きます。しかしそれによって、彼女たちは、内面的な不誠実の道を歩み始めるのであり、その帰結を男性はよく知っています。そしてここでも、誤解を避けるためにいっておかねばなりません、私はもちろん、女性が気に入られないようにすべきだと考えているわけではありません。女性は男性にとって、花飾りであり、詩であり、生の魅力であるべきですし、おそらくは、本来の女性であれば、自ずからそうなっています。そうなるように教育される必要はありません。そう教育しようとすれば、女性自身が墮落し、結果的には男性から見ても、女性自身になるべきだし、なりたいたし、なれると思った姿にはもうありません。

搾取の対象であることが人格貶価を引き起こすように、享受の対象であることも人格貶価をもたらします。どちらも、一ここまでの結果でいえば根本的には同じことです。どちらの場合も、女性は、男性の利己的な意志と欲望に奉仕しています。女性は自己目的ではなくて、たんに男性のために存在しています。女性は、それ自身のうちにではなくて、女性にとって外的なあるもののうちに価値をもちます。一言でいえば、女性は人格ではなくてモノです。モノとは、たんに疎遠な目的に奉仕するものすべてを指すからです。

ここで私たちは、議論をつぎの段階に進める前に、誤解を避けるためにも、真剣に議論するには大雑把すぎるかもしれませんが、一言付け加えておきましょう。よく聞いてほしいのですが、私は、これまでのすべての歴史で、あるいは、ここ80年から100の歴史で、女性がつねに貶められて、搾取されていて、全女性の運命がそう定まっている、といったか？ 私は、そう信じるほど世間知らずではありません。当たり前のことですが、どの時代にも、どのような生活圏にも、人格の発達した、強くて、純粋で気品のある女性が存在しました。そして、これも当たり前のことですが、女性の尊厳と

女性の純粋さは、世界中でいまでも変わらず尊敬されています。私はただ、女性の救済にとっては理論よりも実際の方が進んでいたということを認めた上で、これまでに実際に女性の生活の重荷となってきた誤った女性像が示している女性蔑視という裏面に、はっきりと目を向けていただきたかったのです。

さて、女性が搾取と享受の対象となり、人格ではなくてモノになるという女性蔑視は、私たちが描いてきたここ50年から80年の発展の中で、きわめて顕著になってきました。女性の経済的な危機が倫理的な危機にもなりました。かつては多少とも隠れていたものが、女性が目を向けねばならないほど苛烈な形態をとったのです。

そこで、経済の運動の中に、精神の運動が位置を占めることになります。フランス革命と、それを生みだし、また、それによって生み出された思想は、自由の福音を、哲学の言葉で、そして、世界を揺るがすような、誰にでもわかる歴史的運動で教えました。ルソー、カント、フィヒテがそれに倫理的な基盤を与え、それは、讀ることのできない人類の財産となっています。前世紀に女性がもったおそらく最も高貴な友であるシュライアーマッハーは、宗教的な基盤の上で、個人の権利と美を、とりわけ女性の権利と美を主張しました。古典文学の世界は、女性の理想像を、これまでに見られなかったような素晴らしさで高く掲げました。シラーはそれを、生き生きとした理想主義的な物腰と高潔な倫理のバトスをもって行い、ゲーテは、より写実的な形態ではあるが、十分な自然の深みと魂の魔術を備えて、しかも、高度の宗教的・倫理的な神々しさを欠くことなく行いました。オルレアン少女とゲルトルート・シュタウファッハー、イービーゲネシアとレオノーラ・フォン・エステに、新しい女性像が示されていました。この新しい女性たちは、現実から昇華されていますが、同時に、世間を映す舞台から現実の世界に降りてくることも望んでいました。なぜなら、現実の女性たちが、我が大作家たちを励まし、彼らのモデルになり、彼らを助け、救ったからです。これは、忘れることができません。

そして再び、平板になった文化から個性的な生活の理想が立ち上ってくる時代が訪れました。それが女性をも捉えています。創造的な生活という理想によってかきたてられた社会運動の潮流が、世界中を音をたてて流れています。それが、自由と連帯の新しい福音です。新しい時代が来ました。魂が、人間がモノに対して自分たちの権利を要求する時代が訪れたのです。

モノへと貶められていた女性も、自分たちの魂の権利を、とりわけ女性の魂の権利を要求するようになりました。これこそが女性運動です。女性の権利は、いまや明々白々です。権利を闘いとうとする女性たちは、何を欲しているのでしょうか？彼女たちが欲しているのは、人格の貶価を拭い去り、自分たちの尊厳を再び獲得することです。彼女たちは、もはや搾取や美的享受の対象であることを欲せず、人倫の本質に

基づく敬意と名誉を、疎遠な目的的手段ではなくて自己目的であることを、モノではなくて個性であることを欲しています。彼女たちは、「個性」という言葉を逆立ちさせて用いることも許しません。この言葉は、個性的であるといえれば突飛なことを、個性的でないといえればつまらない人間であることを指すように誤用されていますが、本来は、私たちが外界からのあらゆる圧迫に抗して主張することのできる自己自身の価値を所有している、という思想をこの上なく明確に表現するものなのです。女性は、もはやたんに気に入られることを望まず、とりわけ有能で、健康で、誠実であることを望んでいます。それにもかかわらず気に入られたとしたら、それは喜んでそう配慮しようとする自然の配慮なのです。

女性はまた、たんに利己的に暮らすことも欲していません。個性的な生とは利己心ではないのです。そうではなくて、女性問題を先駆的に闘った女性たちの理想は、奉仕でした。しかも奴隷の奉仕ではなくて、自由を再び勝ち取るために、自由への愛のうちに滅びる自由人の奉仕でした。女性らしさも、失われてよいはずはありません。それは反対に、本来の天上の美のうちにはじめて現れてくるはずのものです。解放されるべきなのは、女性の中のデモニッシュなものや動物的なものではなくて、貶められ拘束されてきた女性の魂です。いかに転倒した試みやエキセントリックな試みとして現実に行われていようとも、この魂の解放こそが、創造的な憧れなのです。救済を求める女性の魂の苦闘を見もせず理解もしないほどに、目も見えず心もない者がありえましょうか？ このような苦闘に伴う悪行さえも、助けを要求する窮状の徴なのです。

女性の新しい理想はこうしたものですが、これも、あらゆる真の理想と同様に、同時に極めて古いものです。今日の女性の精神的な闘いは、こうして、古くて新しい理想を闘いとするものですが、この闘いは、いかなる武器を用いて、いかなる戦場で闘われるのでしょうか？

この闘いは、外側と内側から遂行することができます。外側からの闘いは、市民的権利と経済的地位をめぐる闘いです。

前者は、女性の権利をめぐる特別な戦場になっています。女性が個人としても妻としても自由な人倫的個性であるならば、法は、とりわけ職業活動、財産管理、児童教育に関して、搾取、恣意的支配、奴隷制から女性を守らねばなりません。そして法が女性の助けになるためには、女性が立法に影響力を行使しなければなりません。それゆえに、参政権が要求されることになります。政治的な事柄に関する参政権の価値については、女性問題に心から好意的な立場をとるにしても、様々な見解があります。また、男性が、それなしではいられない財を安易に過大評価するように、女性には、参政権を過大評価する傾向があります。しかし確かなことは、女性が、自己の個性の権利と価値を主張したいのなら、〔政治生活に限らず〕公共的生活全般において、児童教育や愛の奉仕といっ

た本来の女性の領域に関わるところで発言しなければならない、ということです。それゆえに女性は、学校問題と貧困問題に関して、発言し行動する場を広く確保すべきです。また女性は、主婦の世界から労働や愛の奉仕の世界に出ていきたいと望んでいます。そのために、社会奉仕活動に公共的生活への新しい道を求めています。そして、社会・国家制度の巨大な権力や、精神的・物質的な窮状に対して、個々の女性では何もできないので、共同して活動し、闘うために、そして、そうできるように教育し、規律を鍛えるために、自分たちを組織するという方向でも、公共的生活へ参加しています。

女性を市民として、また倫理的に向上させる基礎となるのは、経済的地位です。女性労働者は、社会改良、労災防止、母性保護によって救済されねばなりません。母親となる時間、喜び、能力が、しがつて女性の幸福が闘いとられねばなりません。さらに全般的に、新旧の労働、再獲得すべき新旧の職業につく道を探さねばなりません。それによって女性は、もはやご婦人(Dame)ではなくて、健全ないかなる時代にもあてはまる高貴で大きな意味で、女(Weib)になるのです。また、それによって、労働が、女性の魂に救済的な作用を及ぼすのです。独身女性も、生の内容をもつことになるのです。また、女性はもはや、まったくの表面的な要素を売るのではなくて、世界と運命から独立した価値をもつという、現世の最高の幸福の中で開花し、安らぐのです。そして女性は、尊敬と結びついた個人の愛情というただ一つだけ許された理由から、結婚に身を捧げるという勇気をもつのです。そうした理由がない場合には、女性は、労働を通して愛情と同等の価値をもつ生をおくる以上、男性がいなくても、自信をもって自分の道を歩むのです。

しかし私には、権利と労働をめぐる外的な闘いよりも、女性 新しい理想を貫こうとする内的な闘いの方が重要に思えます。それは倫理的な闘争であり、そのために女性は、その倫理的な理想をしっかりと目にとめておかねばなりません。このことを運動の女性指導者は忘れがちですが、しかし、内から外へというのが正しい道です。この内側からの倫理的な闘いは、私には、三つの形態をとって遂行されねばならないように思えます。

なによりもまず、この内的闘争は、第一に女性の自己評価の、第二に女性の自己教育の問題です。女性は男性に正当に評価されたいのならば、自分を低く評価することをやめねばなりません。自分を貶める主張に迎合してはなりません。また、倒錯した女性像がなお自分自身を支配していることも、正直に認めねばなりません。

実際、女性自身の中に、奴隷の本能がなお住み着いています。取るに足らないことに囚われたり、自分では正面から追求できない物事を、抜け目なく周囲の人々を利用して達成しようしたり、世間の噂にびくびくしたり、もっとよい考えがあるのに、あまりにも簡単にそれをあきらめて譲歩したり

するといったことが、それにあたります。気に入られるようにしたり楽しまれるようにして見かけに奉仕するという心も、女性自身の中に住み着いています。そうしたことは、一部は女性の本性が備える危険であり、一部は、数千年にわたって女性にそうなるように要求されてきた結果です。それゆえに多くの女性が、自分が扱われてきたのと同じように自分を扱おうと望むのです。旧来の紳士のスタイルで自分を迎えにくる男性に、魅力を感じてしまうのです。こうして、女性の最大の敵が女性である、ということになります。それゆえにこそ、ここをめぐって闘いが起こされねばならないのです。

それから、もちろん教育です。私たちが見てきたように、今日に至るまで、女子教育は、人格を貶めるような二つの目的に強く支配されてきました。一つは、女子は早く役に立つようになるべきであるというもので、そのため周知のように、女子教育にあてられる期間は、男子に比べてほんのわずかです。もう一つの目的は、女子はひとに気に入られるように教育されるべきである、というものです。そのために女子教育は、相変わらず、自然でも現実的でもないものになっています。しばしば学校教育の助けをかりて女性の世界で行われるような芸術と文学の訓練に、あまりにも美しい自己欺瞞の訓練に、明け暮れています。例えば、フランス旅行をしたり、フランス風の物事を崇拝したりすること。要するに、西洋の諸国民の中で最も軽薄で腐敗した文化を、パリジェンヌの文化を受け入れることが、信じがたいことに、女性の幸福にとって重要であるとされるのです。女子に対する言語教育がたんに形式的なもので一面的であるということも、女性が自分を深めていけないように邪魔をしています。私たちは、女子教育に、よりいっそうの真剣さを、事物に即した活動を、魂の深化を、さらに、いっそうの自然さ、明瞭さ、純潔を要求します。

そして最終的には、女性の精神的な闘争は、倫理の問題です。真の女性らしさがもつ尊厳、純粋さ、美しさが、この世界で認められるべきであるとすれば、そのためには私たちの倫理が変わらねばなりません。私は、ここでは、二つの点についてのみ皆さんの注意を喚起したいと思います。第一点は、今日の話の流れで容易に予想できることです。すなわち、未婚男性の大部分が、既婚男性の少なからぬ部分が売春婦によって自分を汚している限り、女性の側で結婚忌避が増加していても、そのことを真剣に議論することはできないということです。女性の人格貶価のきわめて大きな部分が、まさにこの売春行為から生じているからです。しばしば自分自身も犠牲者である売春婦が存在するということのうちに、無垢な女性も、その人格を貶められてしまうのです。それに関わらず、かなり「結構な」ご身分に生まれ育ち、物事に対していいかげんで、こうした事態に対しても目を閉ざしていたいという女性が、たくさんいます。無垢でいたいけな自分の娘に、ブレイボーイを、ドイツでいえば享楽の徒を、そう知っていな

がら夫としてあてがうような母親がいる限り、どうして女性全体の向上があり得るのでしょうか？

第二点はアルコールの問題です。女性の品位を汚す太い流れは、酒場から始まっています。女性は、たいていは常連たちの、常連全員ではないが、皮肉な話題にされています。アルコールのもつ雰囲気はひとを粗野にし、優しい感受性を殺し、感性的な衝動に途方もない力を与えてしまうのです。信じてほしいのですが、若者は本来は、女性に対する畏敬と崇高の感情という財宝をもっています。いかなる男性も、潜在的には女性崇拝者です。この感情が、どうして多くの男性から失われてしまうのでしょうか？ 悪い社会や環境、文学がこうした感情を破壊することもあります。多くの場合、そうさせるのは女性自身であり、とりわけ、酒場でそうさせるのです。男性は酒場で、仲間を手本にして、アルコールの雰囲気は飲まれて、女性に対するうぶなはにかみを、自分の純潔を守ってきた衣装を投げ捨てることを学びます。それによって男性は、全異性に対する関係を毒し、自分自身をも根本的に損なってしまいます。とすれば、女性がアルコールを称えることができましょうか？ このアルコールに対する闘いも、女性の倫理的な闘争の中心に位置することになります。女性はこの闘いを、男性のためにも女性自身のためにも遂行します。

反アルコールの闘いに結集した女性の皆さんを前にした私の話は一お分かりのように表面をかすめただけですが、このアルコール問題で締めくくることがよいと思います。ですが、もう少しだけ話すのをお許し下さい。

私は最初に、今日の女性の境遇は50 - 80年前に比べて悪化しているということを皆さんに示しました。これに関して、補完することが、もしこういったほうがよいのなら、訂正することがあります。それは、女性問題が今日のように差し迫った危機を迎えたのは、私にはよいことに思われるということです。その結果、いまや、決定的な一歩を前に踏み出すことができるのです。これまででは、女性に半ば自覚されることなく、あるいはまったく自覚されることなく、女性の生活を阻害してきた多くのものを投げ払うことができるのです。未来の希望の光が、女性の生活のなかに射し込んできているのです。危機が大きくなればなるほど、救済の道が開けてくるのです。

そこにまた、昔からの厄災に苦しみ、自分自身にもはや希望をもてなくなった女性たちにとっての慰めがあります。女性は曙のなかに輝くのであり、そして、それが高貴な心情にとって、大きな慰めになるのです。

そのための一歩は、あなたたちが望めば、すでにここにあります。すなわち、あなたたちは、貧困と人格貶価に対する倫理的な闘いに、いま、他の人々のために乗り出すことができます。

女性が自分たちの利益だけでなく、とりわけ兄弟姉妹の利



益のために倫理的な理想を求める闘士になること、これが運動の最も高貴な目標です。救援や救済のなかで、分別のある奉仕のなかで、女性は、言葉の最も美しい意味で女(Weib)になります。そのためには、女性は、いくつかのものを捨てねばなりません。すなわち、女性は、小さな物事に囚われ、移り気で、物事を客観的に見ないというあり方と、あまりにも感覚的で主観的な女性のあり方と闘わねばならず、もっと客観的に、冷静に、明敏にならねばなりません。女性は、また、専業主婦という理想像を放棄し、より大きなスタイルで生きること慣れねばなりません。

しかし同時に、女性は、一般的には男性にない力と才能を備えています。正義の炎を倦むことなくもし続ける力、正しいものに対する素晴らしい純粋さと感受性、勝利に対する強い確信、善や正義と認識されたものに献身するさいの忠誠心と意志力、これらは、私たち男性には、つねに驚異に感じられるものです。女性の本性が備えるこのような高貴な素質が美しく開花して、卑しい物事を撃退し、混乱した物事を明確にするならば、そして、女性が、この光輝く武器を用いて、

時代の闘争に果敢に参加するならば、私たちは、大いなる善の勝利を経験することになるでしょう。すでに私たちは、多くの場所で、このような素質が開花する予兆を目にしています。例えば、[イギリスで女性差別的な性病予防法に対する反対運動を展開した] ジョゼフィン・バトラーとミス・ホブハウスが行ったことを考えて下さい。女性は、まず私たちに、明るい聖なる力をもたらしましょう。その力がなければ、私たちは文明のより高い段階に到達することはできず、また、その力に支えられて、現在のあらゆる悲惨さを指し示すことができるのです。—ご婦人方や搾取される女性や、自分を搾取させる女性でもなければ、女奴隷や解放された女奴隷でもなく、愛をもって奉仕し、鋭敏に物事を理解し、心から援助し救済する女性が、おもちゃや花飾りとしての女性ではなくて、仕事仲間や闘う同志としての勇敢な女性が、かわいい女性ではなくて、自分の尊厳と愛のために闘う高貴で、誇り高く、純粋な女性が報われるのであり、自己を解放するのです。世界が神の他に必要とするのは、まさにこのような女性です。

(E-Mail Address: [huchida @interlink.or.jp](mailto:huchida@interlink.or.jp).)